

幼児の母親における援助要請の抑制要因について

—回避型援助要請スタイルに着目して—

19004FRM 兼子 明日華

問題と目的

育児期の母親に対する育児支援の必要性は知られているが、それらの支援は母親自身が援助を求めることが前提となっている。そのため、自ら支援を活用できない母親に対して理解を広げ、支援を行う必要があるだろう。そこで、必要に応じて他者に援助を求める力として援助要請が注目されている。援助要請ができない母親における研究には永井・浜崎 (2018) 等があるが、先行研究にはいくつかの問題点がある。したがって、本研究では以上の問題点を補い、幼児の母親の援助要請の抑制要因を明らかにするために、量的および質的な両側面から検討することを目的とする。

研究 1

1. 目的

研究 1 では、母親の援助要請の特徴を検討し、育児状況について調査を行うことを目的とする。永井 (2013) は援助要請自立型、援助要請過剰型、援助要請回避型の 3 つの援助要請スタイルがあることを示した。そこで研究 1 では母親を援助要請スタイルごとに分類し、ソーシャルサポートおよび育児ストレスについて検討することとした。

永井 (2019) の結果が本研究にも当てはまるなら、ソーシャルサポートは過剰型が最も高く、次いで自立型、そして回避型が最も低くなる。また、育児ストレスは過剰型が最も高く、自立型と回避型は同程度になる、と仮説を立てた。

II. 方法

(1)調査対象者と手続き：X 県内の幼稚園・保育園に通う幼児の母親 620 名に調査を実施し、115 名 (平均 36.9 歳、 $SD=5.47$) を分析対象とした。
(2)質問紙：①援助要請スタイル尺度 (永井, 2013)：援助要請自立型、援助要請過剰型、援助要請回避型の 3 因子 12 項目、7 件法。②未就学児のいる親用ソーシャルサポート認知スケール

(SSPS-P) (平谷・法橋, 2013)：24 項目、5 件法。③育児ストレス尺度 (村上・飯野・塚原・辻野, 2005)：16 項目、4 件法。④フェイスシート (年齢、子どもの年齢・性別、家族構成)。⑤面接調査への参加依頼から構成された。

III. 結果と考察

援助要請スタイル尺度の各因子得点を用いてクラスタ分析 (Ward 法) を実施した結果、3 つのクラスタが見出された。それぞれ、自身の置かれた状況によって援助要請をするか否かを判断する「状況判断型」、援助が必要なときには適切に援助要請する「安定型」、自分の力で取り組もうとせず容易に援助要請しやすい「他者依存型」と命名した。各クラスタを独立変数、SSPS-P 得点および育児ストレス得点の平均値を従属変数として分散分析を実施し、結果を表 1 に示した。育児ストレス得点については差がみられなかったが、SSPS-P 得点は状況判断型が最も低く ($F=12.62$, $p<.001$)、安定型と他者依存型の間には差がみられなかった。

結果より、仮説は育児ストレスでは支持されなかったが、ソーシャルサポートでは一部支持された。仮説が一部支持されたのは、状況判断型は回避型得点が高くなることからその特徴を多く引き継いでいると言えるため、先行研究と同様の結果がみられたからだと考えられる。一方で安定型と他者依存型の間に差がみられなかったのは、過剰型得点が同程度であったために、共に得点が高くなったことが影響していると思われる。また育児ストレスで仮説が支持されなかった理由は、悩みの多さを媒介として育児不安が援助要請行動に影響を与える (本田, 2018) ことから、本研究の調査対象者は育児ストレスをあまり感じておらず、悩みが少なかったために援助要請スタイルによる差がみられなかったからであ

ると考えられる。

研究2

I.目的

研究2では、援助要請スタイルによる母親の育児に対する考え方や物事の捉え方の違い、実際の援助要請に与える影響について半構造化面接を用いて検討し、幼児の母親の援助要請の抑制要因を明らかにすることを目的とする。

II.方法

(1)面接対象者と実施方法：面接調査への参加に同意した母親のうち、5名（安定型2名、状況判断型3名）を対象に半構造化面接を実施した。

(2)分析方法：面接の分析にはKJ法を用いた。

III.結果と考察

安定型の母親は適切に援助要請ができていたが、一方で状況判断型の母親は適切に援助要請ができていないことが明らかになり、クラスごとに違いがみられた。また面接対象者ごとの分析結果をまとめた結果、抑制要因として“ソーシャルサポートの少なさ”、“セルフステイグマ”、“自尊心の傷つきへの恐れ”、“困り感の無さ”の4つが見出され、幼児の母親における援助要請の抑制要因は1つに限られず、いくつかの要因が絡み合っ存在していることが示唆された。また促進要因として“ソーシャルサポートの多さ”、“ソーシャルサポートの活用に対するポジティブな結果の予期”、“時間的展望があること”、“自己効力感の高さ”の4つが見出された。

例えば、抑制要因の1つである“セルフステイグマ”について、永井・木村・飯田（2019）は大学生においてセルフステイグマが強くなるほど援助要請意図が低くなることを明らかにしている。また、促進要因の1つである“時間的展望”について、岩瀧・山崎（2008）は大学生において、友人への援助要請には過去の経験をポジティブ

に捉えていることが重要であり、大学教員への援助要請には過去をポジティブに捉えることに加えて、未来展望が重要であるとしている。

以上より、本研究において見出された援助要請の抑制要因および促進要因は、援助要請領域における先行研究と重なる部分が多くあることが分かった。先行研究における対象者は本研究の対象者である幼児の母親とは異なっているものの、先行研究と同様の結果がみられていることから、幼児の母親の援助要請の抑制要因および促進要因において、今までの援助要請研究の知見がある程度適用できることが明らかとなった。

総合考察

研究1の問題点として、回避型の特徴を持つ母親がほとんどみられなかったことが挙げられる。回避型の特徴を持った母親は調査への回答に対しても回避を示した可能性があると考えられる。そうだとすれば、回避型の特徴を持つ母親を集団の中から見つけ出すことは非常に難しいことであるかもしれない。したがって今後は、集団の中からどのようにして回避型の特徴を持った母親を見つけ出すのかについて検討することが必要である。また研究2においては、幼児の母親においても今までの援助要請研究で扱われてきた抑制要因や促進要因の知見が適用できることが明らかとなったが、その反面で幼児の母親に固有であると思われるような要因は見出せず、またそれぞれの面接対象者について個別に深く考察ができなかったために援助要請スタイルの質の違いについては扱えなかったことが問題点であるだろう。したがって今後は、幼児の母親に固有であると思われる要因を検討できるように調査方法等を工夫する必要があるとともに、援助要請スタイルの質の違いについて検討することが必要であると考えられる。

表1 各クラスにおけるそれぞれの尺度得点の平均値とSD、および分散分析の結果

| | 1.状況判断型 (n=53) | | 2.安定型 (n=47) | | 3.他者依存型 (n=15) | | F値 | 多重比較 |
|--------|----------------|---------|--------------|---------|----------------|---------|----------|-------|
| | 平均値 | (SD) | 平均値 | (SD) | 平均値 | (SD) | | |
| SSPS-P | 43.83 | (11.36) | 54.45 | (11.57) | 55.67 | (12.83) | 12.62*** | 2=3>1 |
| 育児ストレス | 40.08 | (8.44) | 41.77 | (8.95) | 42.33 | (10.03) | 0.63 | 1=2=3 |

*** $p < .001$